

奈良女子大学大学院人間文化研究科

「魅力ある大学院教育」イニシアティブ

生活環境の課題発見・解決型女性研究者養成

News Letter

6

2008.9.30

活
動
報
告



『国際的FD視察・交流・研修』 アメリカのFD理論と実践から学ぶもの

杉峰英憲

社会生活環境学専攻 人間行動学講座教授

本学では、魅力ある大学院教育イニシアティブのプログラムがあり、この度の海外視察交流研修は、その一環として、本学国際交流センターとの合同企画として行われたFD研修企画です。

研修団の構成は、大学教育改革の理念の研究、大学教育方法改善の研究、大学生の社会倫理意識の研究にそれぞれ取り組んでいる3名の院生としました。研修先の大学は、FDの主要な諸局面が特徴的な諸大学を、アメリカ合衆国西海岸を中心に選定しました。訪問した7大学と、研修の結果得られた成果は以下のようです。

本学と提携のある伝統的女子大学ミルズでは、リベラル・アーツを基本に学問の実践化を図るFDの課題を、スタンフォード大学では、自由と創造のダイナミクスを旗印に学生との知的共同体を目指すFDを、ポートランド州立大学とワシントン大学では、ユニバーシティ・エクステンションとして社会連携を枢軸とするFDを、オレゴン大学では、学生の体験を基盤とした活動的学習プログラムの実践を、オレゴン州立大学では、社会的視野拡大を図るための教員学生共同モデルを、そして、シアトルのマイクロソフト本社も訪問し、産学協同イノベーションモデルの具体的な説明を受けました。

今回の研修で最も印象に残ったことは、学生の学習の権利は、学習する努力と忍耐を方向付ける知識への畏敬の念に根ざすものであること、大学教員は、研究への努力と忍耐を学習者と共有し、学習者は、学習への熱意によって大学の教育力を活かし、大学という知的共同体の共同主体になることが大学におけるFDの課題となっていたことでした。本学においても、こうした教員と学生の学問へのダイナミズムを機軸にFDが展開できればと思われました。



『学生による国際的な研究セミナー』報告会

モンゴル民族の生活と住居

内モンゴル民族自治区における天幕住居「ゲル」の現状と今後

野村理恵

博士後期課程 社会生活環境学専攻3回生

中国・内蒙古大学蒙古学学院にて開催した「学生による国際的な研究セミナー」報告会を実施しました。今回のセミナーは、急速に姿を消しているモンゴル族の伝統的な移動住居「ゲル」が、中国国内でどのように位置づけられ研究されてきたのか、また現在どのような状況にあるのかという話題を中心としており、現地の蒙古学・民族学・経済学等の専門家による多方面からの議論をもつことができました。内容をすべて報告することはできませんでしたが、報告会出席者の方の、現地での議論内容についての関心は高いものでした。

また、院生が国際セミナーを企画・開催するに際し、重要な課題も明らかになりました。まず言語の問題です。今回は企画者の一人が現地出身者で、更に現地参加者の多くが日本語を解していた為、複雑な議論も可能でした。しかし本来ならば、発表内容の確認、時間配分等通訳者との綿密な打ち合わせが必要となるため、どのような言語サポート体制で開催するかが重要となります。また、共催大学との関係構築が重要なことが実感されました。内蒙古大学蒙古学学院とは、2006年度から共同研究(平成18年度科学研究費補助金・基盤研究A・代表：今井範子)を行っており、更に2007年12月には本学生活環境学部及び人間文化研究科との間で、学部間交流協定が締結されています。その上でのセミナー開催ということで、院生が主体でも円滑に準備を進めることができました。特に現地での広報や場所の確保、事務連絡等バックアップ体制の有無は重要です。

最後に、本セミナーの企画・開催は今後研究を進める上で大変貴重な経験となりました。ご支援頂いた方々には深く感謝いたします。(2008年2月19日、参加者12名：学内10名、学外2名)





私の研究 博士前期課程

職業服としての女子の洋装

看護婦養成機関の看護服を中心に

宇野保子

博士前期課程 生活文化学専攻2回生

このたび社会人に開かれた「長期履修学生制度」により、若い学生さん達と共に学ぶ機会をいただきました。

私が今研究しているのは、「日本における洋服受容の過程」を明らかにする目的の中での「女性の職業と洋装化」についてです。明治以降の日本における洋装化は、明治政府の近代化政策の一環として捕らえられ、男性の洋装化はその政策の中で実現していきましたが、女性の場合は容易には進展しませんでした。ところが、一般の女性の洋装がほとんど見られなかった明治中期、看護服にはすでに洋服が採用されていました。この点に注目し、看護の仕事が女性の専門職として確立されていく過程で、その形としての服装がどのような意味を持って考案され、着用されていったのか、日本の洋服受容の過程における「看護服」の位置づけを試みようとするものです。

地方の短大で被服関係科目を担当してきた私は、これまでいくつかの研究に取り組んできましたが、本研究科で取り組む研究は、学生時代の被服学科での初めての出会いのテーマであり、ライフワークとしたい研究です。

かつて本学で学んだ『服装史』は、従来の時代区分に従った為政者側からの歴史には見られない「服装」を通して視る生活の歴史がとても新鮮で、魅力的でした。被服は生活用具の一つでありながら、それを人が着用してはじめて人格を持った服装として成り立ち、その存在が認識されます。それだけに、古今東西、様々な服飾表現が試みられ、それがその時代に生きる人々の生活感情とともに、現在の私たちの衣生活にまで連なっています。ここに、深い愛着と限りない興味を覚え、被服を研究対象としてきました。本研究科での学びを新たな一歩にしたいと思います。

私の研究 博士後期課程

企業福祉と子育て支援

事業所内保育施設の事例において

川上千佳

博士後期課程 社会生活環境学専攻3回生

私は、企業福祉の意義と課題について、子育て支援の側面から事業所内保育施設を事例にとりあげ、研究しています。

従来、従業員に対する手厚い企業福祉は、日本企業の経営上の特徴の1つでした。しかし、近年は、社会保障全体の財源の確保の問題や、企業経営上の効果の低下、企業や職種間の格差の拡大などを理由に、企業福祉は不要という意見が聞かれます。本当にもう日本では企業福祉は必要ないのか、このような問題意識から私の研究は始まりました。

現在の日本では、子どもの数が減る一方で、働く女性が増え、保育所を利用したくても利用できない待機児童は約18,000人に上ります(2007年4月現在)。子どもを預けるところがないことを理由に、女性が仕事を辞めざるを得ないという状況が生じています。そうした中、認可保育所に加え、保育サービスは多様性を増しており、企業が自社の従業員を対象に設置・運営する事業所内保育施設の整備も進められています。事業所内保育施設については、従来、医療従事者やブルーカラーの女性を対象にしたものが一般的でしたが、最近はホワイトカラーの女性を対象に導入される動きがあります。それぞれの企業の就労形態や業務内容に即したサービス提供が行われる点に、特徴があります。

実際、育児休業制度の規定のある企業では、出産した女性の約7割が育児休業制度を取得し、さらに、育児休業復職者のうち約3割が短時間勤務制度を、約2割が育児の場合に利用できるフレックスタイム制度を利用しています(厚生労働省「2005年度女性雇用管理基本調査」)。女性が仕事を継続していく上で、職場での制度整備は不可欠であり、企業は今後も個人・家庭の自助努力や行政施策とともに、子育て支援の一端を担っていくべきと考えます。





キャリア形成群 博士後期課程

『大学教員教職実習』で学ぶ

佐久間春夫

社会生活環境学専攻 人間行動学講座教授

本実習は、将来大学等の高等教育機関で指導に当たる人を対象に、大学教員に求められているFD（教育内容及び教授方法の改善）における実践力を高める為に平成18年度に開設されたものであります。その実践の場として附属中等教育学校のアカデミック・ガイダンス（以下AG）が活用されています。このAGは、筆者が校長の時、高大連携の取り組みの一つとして、中等教育学校の3・4年生を対象に、大学教員が、それぞれの専門分野における最先端の研究内容について平易に教授する実験授業として平成14年に開設されたものです。具体的には、1日3時間からなる5日間連続（9月初旬）で、大学や附属の施設を使用しながらの授業観察と、各自が伝えたい専門分野の特徴に応じた実験実習、講義などの授業形態を取っています。

これまでに行われてきたテーマを紹介しますと、実験も取り入れた「バイオメカニクスからみた“動くからだ”の不思議」、グループ実習に基づく「達成動機とストレスコーピング」講義形態としては「病とは何か、健康とは何か」「思春期病理について」「大学での学問」などが行われてきました。

最後に、次のような実習生の担当後の感想を載せることにより、本実習の意義を強調したいと思います。

- ・「なぜ？」の部分を明確に提示することで大学の学問であっても難しいだけにはならないのではないかと感じた。
- ・問題を提起して予想をさせたり、逆に何が問題なのかを生徒から引き出してみたりという場面では、想像していなかった答えが返ってくるという反応もみられ、知的な刺激を受けた。
- ・今回AGで講義を担当することによって、大学の教員として必要な資質・能力について改めて考えるきっかけになった。

『大学教員教職実習』の感想

元根朋美

博士後期課程 社会生活環境学専攻2回生

母校で大学教員教育実習の一環で授業を行うことは、私の中に懐かしさと緊張とを同時に生み出すことになりました。今の生徒は、かなりユニークな学年と言われた私達とは異なり、かなり優秀だという噂を耳にしていたからです。

実習準備における最初の難関は、自分の研究内容をわかりやすく話すという課題でした。詳しく補強しながら話すのではなく簡潔にわかりやすく伝えることは骨の折れるものでした。しかし、事前研修を通し、単に自分の持っている知識を話すだけでは退屈という指導を受けることで、中学生という「相手」に対する配慮を意識した内容に抜本的に作り変える機会を得ました。

その結果、次の三点を視点とし、当日をシミュレーションしながら準備を進めました。第一に、聞いてもらうからには何か感じ、考えてもらえる内容となるような「テーマ」。第二に、対象となる中学生が現在置かれている現状を捉える「状況把握」。第三に、聞きたい、参加したいと思ってもらえる授業となる「構成と工夫」です。

当日は、かなり緊張しながらも生徒の皆さんの熱い視線を感じながら実習をさせていただきました。昼休み前の授業であったこともあり、授業終了後、数名の生徒が話しかけてくれたことは授業に対する評価の一部であると感じ嬉しく思いました。

最後に、今後もしこの実習終了後にもう一度生徒達とコミュニケーションが取れる場があれば、良い点や改善点を見つけることにつながるかもしれないと感じました。





セミナーの様子(左から右に報告①, ②, ③)

『大学院生の自主企画による研究セミナー』

報告①：質的調査の実践的手法

話の聞き出し方、まとめ方 ～プロの記者に学ぶ～

元根朋美

博士後期課程 社会生活環境学専攻2回生

本セミナーは質的調査の実践的手法の習得に焦点化された研修会の開催を目的とし、講師に報道の第一線で活躍され豊富な現場経験をもつ理論家であるMBSラジオ報道部長の大谷邦郎さんをお迎えし「話しの聞き出し方、まとめ方」についてお話をいただきました。

最初に参加者に質問や意見を求めながら講義を進めると話されたとおり、全員が参加する形式で取材中に気にかけている手法をお話をいただきました。参加者から質的調査の手法以上の何か色々なものを得た、今後の調査に向けて新たな気づきを発見できたとの感想が多数寄せられたことから、調査対象者の特性や思考ならびに思想を引き出すための手法習得に、大きな示唆が得られました。

(2007年10月13日開催 参加者23名：学内21名、学外2名)

報告②：質的研究の記述法を探る

佐藤令奈

博士後期課程 社会生活環境学専攻2回生

本学生生活環境学部中会議室において院生自主企画セミナー「質的研究の記述法を探る」が開催されました。講師には気鋭の若手研究者、小宮友根さん(東京都立大学)・鶴田幸恵さん(奈良女子大学)と、社会構築主義の第一人者である中河伸俊さん(大阪大学)をお迎えし、近年もてはやされる「質

的研究」について、「質的」とはそもそも何か、その手法とはどうあるべきか、についてのご講演をいただき、その後意見交換が行われました。既存の手法に対する極めて批判的な視点に漸近し、また院生にとっては一歩先行く若手研究者から大いなる刺激を受ける場となりました。さらに参加者の半数が学外からの来校であり、人的交流の一助ともなりました。

(2007年12月1日開催 参加者22名：学内11名、学外11名)

報告③：社会学におけるエスノメソドロジ的無関心

山本智子

博士後期課程 社会生活環境学専攻2回生

榎田美雄さん(徳島大学)を講師に迎えた本セミナーでは、社会学、あるいは、近隣学問領域で用いられる質的な方法論の問題点や有効性を議論する中で、参加したひとりひとりが自身の研究に引き寄せながら、「人々の方法論」といわれている「エスノメソドロジ」についていくつかの視点と理解が得られたのではないかと考えています。「人が生きるということは、なんらかの実践を行っている。ゆえに、エスノメソドロジとは、『わたしたち』がもつ方法論である」ということ。このかなり抽象的な概念が、セミナーの講義の中で、実践例を提示しながら具体化され、エスノメソドロジストが、なぜ実践を記述しなければならないと考えたか、そして、どのように実践を記述してきたのか、についてかなり重要な示唆を得られたと考えます。今後も、こうした研究方法についてのセミナーが企画され、これからの質的研究について模索・貢献していくことを願っています。

(2007年12月12日開催 参加者12名：学内10名、学外2名)

大学院教育推進支援室からのお知らせ

支援室は本教育プログラムに関する情報の発信拠点として機能しています。本プログラムの全貌や最新情報を紹介するHPや、教員が綴るエッセー「やえ・このえ・ときの声」などを掲載した学内向けメールニュースを配信しています。新E棟に位置する支援室前の掲示板にはJREC-IN研究者人材データベースの求人情報が掲示され、学生に進路情報を提供しています。また、パソコン、ビデオカメラ、デジタルカメラ等の機器類や、イニシアティブ関連の図書類(女性研究者に関するもの、生活環境領域の研究法や調査法に関するもの、大学教育に関するものなど)を用意し、学生や教員の必要に応じて貸し出しています。自主活動支援など各種支援の手続き窓口でもあり、常駐する教務補佐員が学生の様々なリクエストに対応しています。

■ 開室時間：月曜～金曜 10:00～12:00、13:00～17:00

■ 大学院教育推進支援室 ホームページ

<http://www.nara-wu.ac.jp/initiative-life/supportroom.html>

本教育プログラムは、文部科学省・平成17年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ教育プログラムとして採択され、平成19年度以降、学内の予算措置によって継続しています。